Title	東日本大震災国際神学シンポジウム いかにしてもう一度立ち上がるか How can we start again ? Centurial Vision for Post-disaster Japan : これからの 100 年を見据えて 実施結果 : アンケート集計結果の概要(総合研究所 News)
Author(s)	聖学院大学総合研究所
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.22-No.1, 2012.9 : 34-38
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3992
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

東日本大震災国際神学シンポジウム
いかにしてもう一度立ち上がるか
How can we start again ? Centurial Vision for Post-disaster Japan
―これからの100年を見据えて―
実施結果―アンケート集計結果の概要―

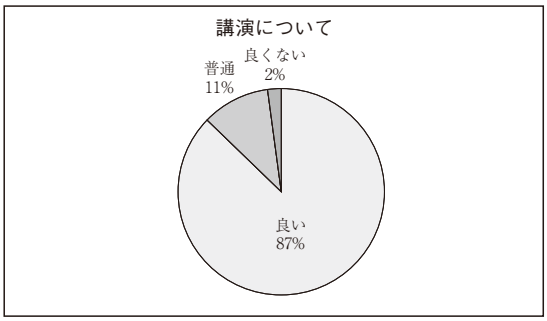
日　時　2012年３月23日（金）13：00～17：30
場　所　女子聖学院クローソンホール

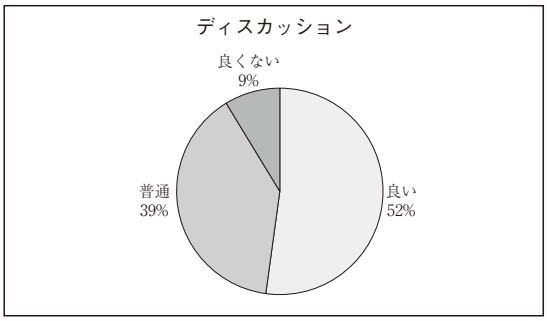
【プログラム】
総合司会　倉沢正則（東京基督教大学学長）
開会の挨拶・祈祷：中台孝雄（東日本大震災救援キリスト者連絡会会長）
会衆讃美「こひつじをば」稲垣俊也（東京基督教大学講師、オペラ歌手）
奏楽　山内吏奈（東京中央バプテスト教会音楽主事）
報告「限りなく狭間のない『支援と宣教』」“Infinitely Close Relationship between Disaster Relief and Evangelism”
森谷正志（仙台バプテスト神学校校長）
講演１「神の時を捉える：神のわざへの参与」“Grasping the Time of God: Participating in His Work”
藤原淳賀（聖学院大学総合研究所教授）
講演２「大災害時におけるキリスト教的応答:教会史から学ぶ」“Christian Responses in Times of Disaster: Learning from Church History”
Juan Francisco Martinez （フラー神学校教授）
講演３「日本キリスト教史における東北」“The

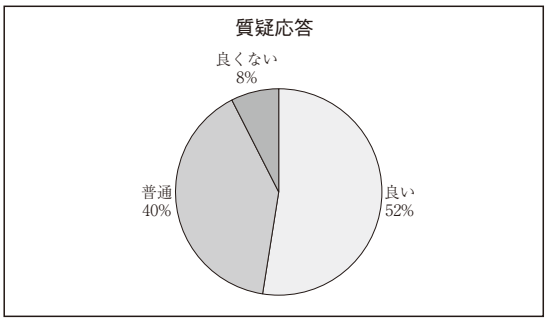
Tohoku District in the History of Japanese Christianity”
山口陽一（東京基督神学校校長）
ディスカッション
独唱賛美「ホザンナ」（Jules Granier作曲、中田羽後訳詞）　稲垣俊也、山内吏奈
祈祷：倉沢正則
講演４「同情する苦しみ、また不正義との対決としての十字架」“The Cross as Passionate Suffering and as Confrontation of Injustice”
Glen　Herald　Stassen（フラー神学校教授）
講演５「神に迫られた改革：日本を神学する」“The Reformation Pressed upon Us by God: Thinking Theologically of Japan”
大木英夫（聖学院大学総合研究所所長）
ディスカッション
質疑応答・総合司会者コメント（倉沢正則）
会衆讃美「キリスト教会の主よ」稲垣俊也、山内吏奈
閉会の挨拶・祈祷:阿久戸光晴理事長（聖学院大学学長・理事長）
歓談

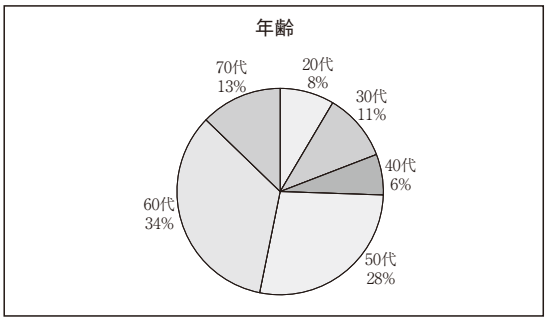
【結果の概要】

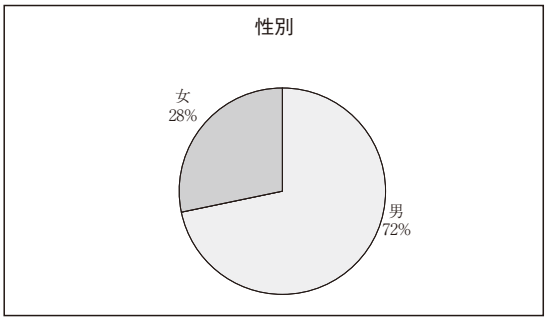
・参加者は265名。内、アンケート回答者は47名だった。
・講演について、「良い」という意見が87%と高い評価だった。ディスカッション、質疑応答については「良い」がともに50%だった。
・自由意見としては、「良い講演に感謝する」「大変考えさせられる良い内容だった」「ディスカッションタイムは良かった」など。



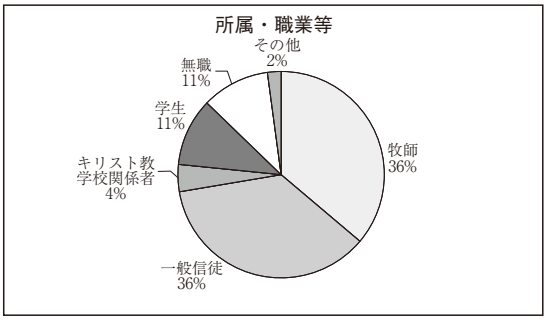




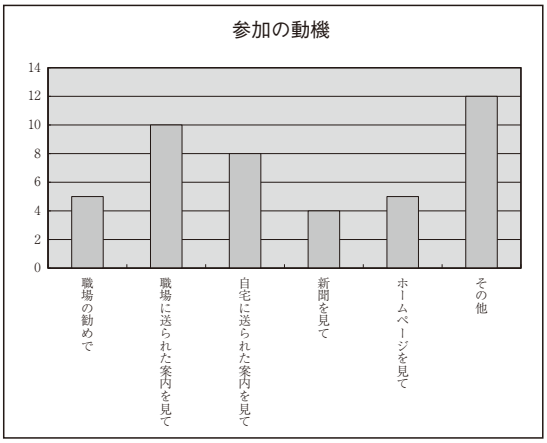




＊回答者の年齢としては、60代が最も多く33%、次に50代28%となった。
性別は男性72%、女性28%。



＊所属・職業として、「牧師」「一般信徒」がともに36%となった。



＊参加の動機として、「職場に送られた案内をみて」が最も多く、次に「自宅に送られた案内を見て」となった。
「その他」として、「友人から聞いて」「教会で案内をみて」「学校で案内をみて」「教会で知って」。

自由意見

・キリスト者としてこの災害（原発を含む）をどう見るか。心の整理ができ、また課題が与えられました。感謝します。
・たいへん啓発されました。自分の宣教のあり方、その内容について反省と再考の必要を痛切に感じた。良き講演を感謝する。
・神学的、歴史的、社会的視野からこの度の災害を受け止める助けとなりました。
この企画を立ち上げ、協力して実現されたことを感謝します。災害を通して絆は地域とキリスト教界にもたらした主のわざにも感謝します。

大木英夫　聖学院大学総合研究所所長

・災害があると、その規模が大きければ大きいほど、これは神のなされたことか、試練なのか、罰なのか、という疑問がわく。クリスチャンでなくてもそれは同じだと思う。こういう敬虔さは人類全体にとって大切だと思う。このシンポはそのことを確認させた。
・具体的なこれからのリーダーシップのつながりについての宣伝等があれば、今後はのつながりとなるのでは。
・大変有意義な講演であった。歴史上未だかつてなかった地震、津波を深く考えることは大切であると思う。これからどうしていくかが大切である。日本の教戒の教派、団体の壁を打ち破るのは大変である。
・概論的、基礎的なことが多く、もう少し具体的なことから話していただきたかった。講演者の中には講演なのか、説教なのかよくわからなかった。ただ色々と考える機会を与えてくださった。
・キリスト教と大震災との神の霊示について数々の課題提供は良かったが、具体的霊的指導が欠如し、結局大切な神の心が見出せなかった。
・今回のシンポジウムを通して、主がこのように日本と世界のキリスト者がひとつになって祈り、教会が立ち上がる機会を与えて下さったと信じます。藤原先生の労に感謝します！
・会場および、ロビーの端（団体のブースのあるところ）の照明が暗かったです。
冒頭の被災地からの報告がよかったです。遅れ

て全部聞けなかったのは残念でした。

・娘が聖学院の中３です。教派をこえての講演会、感謝でした。TCUと聖学院大学総合研究所（主催）フラー神学校（共催）による開催は、まさに奇跡だと思いました。

・神様の憐れみとご計画の中に、全てのことが置かれ、この日本の全ての人々が置かれていることの幸いと、先に主を信じるように導かれた者として与えられているものについて考え始めています。祈ります。

・それぞれの講演内容はとても考えさせられる良い内容でした。自分自身がクリスチャンとしてこれからどう歩んでいくのか考えさせられました。

・ディスカッションタイムは良かった。テーマを深められたし、つながりもできた。質疑はもう少し。答えの時間がない。統括は不要。
スタッセン先生がギリシャやトルコにふれていることがよかった。最後の原爆に対する赦しの言葉も心にしみた。大木先生の視点もユニーク。

・シンポジウムである以上、いちばん期待されるのはパネラー間の問や応答。それをコーディネートするのが綜合司会者、質疑もそのプロセスの中に反映されればよいのであって、生なかたちでフロアーとパネラーが一問一答的に時間を使うのはシンポジウムの趣旨とはちがうと思っています。
私としてはこういうことを深めてほしかった、
①いたみ、苦しみとは神学的に何か。
②それは救済されるのか。
③その神学はどのような新たな社会像を提示するのか。
④過信とか欲望とよばれるもの、それを支えてきた「神学」はなかったのか。

グレン・スタッセン　フラー神学校教授

山口陽一　東京基督神学校校長

・森谷師以外のプレゼンは全て震災前から自身が持っている神学で、震災を利用して自分の意見の発表の場にしたようにしか見えなかった。なぜ、神学者は被災地に赴き、現場の人の話を聞き教会の活動を考察し、それを神学しないのか？この一年、何をやっていたのかと思う。
神学者の役割は、現場で取り組んでいる方に向けて、客観的に聖書の原則をぶつけていくことではないか。このようなシンポジウムは東北で持つべき。しかも震災の先端で牧師として生きている方を交えて行うべき。今日、新しく得られるものは、特になかった。とても残念だ。
被災地では本当に牧師が戦っている。しかし、阪神淡路で宣教が進むどことか、後退してしまった。何故か？どうして今までの３回の日本がキリスト教が向き合ったときに福音が受肉しなかったのか。その答えがないなら神学の意味がないではないか。

・英語の通訳を出来れば全部していただければと思いますが。

・私にとって実の有る時でした。ありがとうございました。

・この課題を通して、教団教派の一致に向けて協力の働きが実っていきますように。

・教派をこえて主の私たちになすように戒めておられる奉仕を見出したい。

・たいへんタイムリーな企画でした。ありがとう

ございました。

・耳の遠い人もいるので、音量調節をよろしく。

・示唆にとんだ講演でした。

・大変有意義なシンポジウムでした。

・ありがとうございました。